

新たな生活様式実現を柱とする多自然居住推進事業

丹波ワークショップ記録

「多自然居住推進ワークショップ in 篠山」



日 時：2004年3月16日（火）

会 場：篠山市立四季の森生涯学習センター

新たな生活様式実現を柱とする多自然居住推進事業

「多自然居住推進ワークショップ in 篠山」記録

日 時：2004年3月16日（水） 18:10～21:20

会 場：篠山市立四季の森生涯学習センター 東館1階会議室

参加者：青野、赤井、稲井、梶村、金野、小林、小森、才本、坂井、白髭、杉尾、ダンカン、中尾、中川、中原、西垣、野崎(瑠)、野崎(隆)、坂東、藤岡、向井、元田、八木、山本、横山、吉岡、若泰、(川村、東末) 合計29名

このワークショップは、地元住民・関係者10名(地元NPO3名含む)、篠山市役所9名、県民局1名、その他9名(まち研メンバー含む)の29名の参加で開催され、司会進行を野崎隆一氏が務めた。

1) 行政・NPO 協働助成「新たな生活様式実現を柱とする多自然居住推進事業」の概要

(野崎隆一:特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所)

最初に、なぜ今日集まっていたかという概要説明をさせていただきます。これは、ひょうごボランティアプラザの「NPOと行政の協働助成事業」(NPOの提案で行政と協働を推進していくような事業に助成する)という制度があります。また、兵庫県住宅マスタープランの推進については、NPOがいろいろな役割を担うと書かれていますが、現実的にはそういう場面が充分できていません。神戸まちづくり研究所として、行政とNPO、専門家や地元住民を巻き込んで、各地にまちづくりに関するいろいろな課題を話し合う場をつくらうと「兵庫まちづくりプラットフォーム設立事業」として提案しました。今日は多自然居住がテーマですが、場所によっては古い街並み保存であるとか、神戸地域ではオールドニュータウンの再生が課題となってきています。そういう地域ごとの課題を話し合っ解決していけるような公共的な場をつくらうという提案です。

まちづくりプラットフォーム事業は今年が2年目ですが、丹波地域については多自然居住の推進、特にUJIターンをどのように促進していくかをテーマに、「新たな生活様式実現を柱とする多自然居住推進事業」として、丹波まちづくりプラットフォームをつくれぬかという提案を独自にしています。それで今日、皆さんに集まっていたというわけです。今日はNPOの方、それから行政の方や地域の専門家の方も来られていますので、議論の中から、そういったプラットフォームをつくらうという気運が生まれてネットワークができればと思っています。

これから、それぞれの立場でいろいろな発表をしていただきますが、その後、皆さんでディスカッションしていただき、行政と専門家とNPO、それから地域住民の方々が集まって恒常的に話し合っていくようなプラットフォームをつくれればと思っています。

2) 団塊の世代と田舎暮らしをめぐる最近の論考

(小森星児:ひょうごボランティアプラザ)

現在、多自然居住や田舎暮らしが非常に話題になってきていますが、特に今どうして急いでいるかということを見ていただきたいと思います。ご存知のように1945年に戦争が終わり、1947～49年ぐらいの間に、年間230～240万人の異常と言われるほどのベビーブーマーが生まれました。それから60年経つわけですから、2006～8年あたりで退職期を迎えるわけです。興味深いことに、ベビーブーマーというのは世界各国で生まれたはずなのですが、これほど顕著に現れている国は少ないのです。たとえばアメリカは、多分移民の関係でもっと下の方が膨らんでいるのだらうと思いますが、先進国であるイギリスを見ても特段ベビーブーマーという時期は

はっきりしていません。日本はこの時期の人口が極端に多く、結局この人々が日本の高度成長を支えたのです。これはちょうど日本のモータリゼーション元年と言われるような時期で、経済が非常に発展した大きな原因の一つが、この時期に若い労働力が大量に労働力人口に加わったからです。

しかし、現在定年はどうなっているか。たとえば20年前は55歳定年というのがかなり多かったです。55歳と60歳がほぼ同じくらいで、間に56から58歳定年制度のところ若干あったのです。その後、段々定年が引き上げられてきて、現在は91.6%までが60歳定年になっています。ここ数年は早期退職や退職勧奨が行われ、もっと早く退職するものがたくさん出てきていますので建前と実態は違うのですが、いずれにしても60歳が大きな転機です。その転機を迎える人口が後2~3年後にはどっと増えてくるというのが、現在我々の当面している問題です。そういう人々は田舎で育った人が多いのです。このベビーブーマーの25年ぐらい後の第2次ベビーブームの出生者の多くは大都市生まれの大都市育ちで、田舎暮らしを知らない人たちがかなりいるだろうと思われれます。そういう点で言えば、やはり第一次ベビーブーマーの人たちが田舎へ帰りたいというのが、まさに田園回帰と言うべき現象ではないかと思われれます。

3) 神戸まちづくり研究所が実施したアンケート調査の概要

(小森星児：ひょうごボランティアプラザ)

篠山出身のベビーブーマーたちが一体何を考えているのかを調査するために、さる高等学校のベビーブーム時出生者を選んでアンケートを実施しました。パイロット的な調査ですので、丹波地域以外に住んでいる男性のみに送っています。

驚いたことに、たとえば第1問の「多自然居住(田舎暮らし)について、あなたはどのように思われますか。」という設問に対して、「計画がある」が23.5%、「具体的な計画はないが、一度はやってみたい」が24.5%で、少なくともほぼ半分の人が「田舎暮らしをしたい」、あるいは「一度やってみたい」と答えています。いくら丹波出身者とはいえ、ここまで高い数字が返ってくるとは思いませんでした。第2問の「終の住処にどこを選ぶか」では、当然ながら「住み慣れた今の場所が一番いい」という人が半分おられるわけですが、3分の1の人が、「自然が豊かでのんびりした田舎へ移りたい」というように、かなり多くの人々が田舎へ帰ってもいい、あるいは田舎で住みたいと言っています。問6の「事情が許すなら、丹波に住んでみたいとお考えですか。」では、「永住したい」という人が11.8%、「大都市と田舎の両方で暮らしたい」という人が36.3%で、ほぼ半分の人が何らかの形で丹波に住んでもいいと答えています。更に1割の人は、「身内や親しい仲間と田舎住まいを共有したい」と。こういう人も入れると非常に多くの人々が潜在的に、丹波なのか田舎なのかの分析が必要だと思えますが、帰りたいと言っているわけですから、やはり半数近くの4割の人が医療や福祉のことをあげています。同じぐらいの割合で、仕事や収入、近所づきあいのこと等々についても懸念されています。これはやはりこれからカバーすべき点ではないかと思っています。問4-3の「地元で期待すること」では、半数の人が「空き家の登録、紹介、家主代行など地域資源の有効利用システムの整備」をあげています。問4の説明は省略しましたが、既に田舎に、たとえば両親が住んでいる古い家がある人がかなりおられます。その有効活用ということも当然この中に入ってくるというわけです。いずれにしても、そういうシステムを望んでいるということも非常に重要なことではないかと思えます。あるいは多自然居住案内所といったインフォメーションセンターの開設も必要になってくる等々あります。

後、細かなことは省略しますが、こういうふうに見ると、地元の高等学校の卒業生ならこれぐらいは当然だろうというご意見もあるかと思いますが、これほど丹波に対して期待が深まっているということは大変興味深いことであると思えます。

4) 兵庫県における取り組み

(小森星児:ひょうごボランティアプラザ)

『多自然居住の推進について』(平成 14 年度)

多自然居住の推進に対して、行政は一体何をしようとしているのか。お手元に「多自然居住のまちづくり」というリーフレット(<http://web.pref.hyogo.jp/tosisei/tasizen/hukyuupamph.htm>)をお配りしていますが、これは県で実施した調査結果です。県ではこれに加えて、現在青垣町で田舎暮らしのための住宅の供給や、そういう人たちに対する支援策を展開しています。これは 3 年計画で、今年が八千代で、来年は大河内でやると聞いていますが、どちらもパイロット的な事業で、その後は全然見通しが立たないということのようです。リーフ自体は上手にまとめてあり面白いと思うのですが、中途半端な面もあります。たとえば、NPO に期待すると書いてあるのですが、肝心の NPO はこういうことを期待されているとは最近まで聞いたことが無く、一体どうなっているのかという気もします。それ以外にも 21 世紀ひょうご創造協会が、やはり多自然居住に関する調査をしています。実は書類を今日貰ったのですが、「農村地域住民の生活実態把握を基点とした多自然居住地域の創造に関する研究」という舌を噛みそうな題ですが、言うことは言うが、具体的に何をどうしたらいいのかということがさっぱり見えてこないというのが正直なところです。

では、具体的に何をすればいいのか。たくさんの人々が田舎暮らしに憧れているのは日本だけではありません。先進国の欧米では、ある年になればこういう静かな豊かな環境のところへ行きたいと、どこの国でも共通です。しかし実際には、その選択肢が大変限られており、情報も十分でないというのが現在の姿です。民間が出版している「田舎暮らし」などの月刊誌では、業者へ電話～現地見学のチェックから不動産物件情報の読み方まで掲載されています。県が提供している空き家情報と比較してみると、あまりの違いにため息が出ます。それは当然で、行政がやるとなると載せてほしい項目以外の項目は載せるわけにはいかないわけです。どこにどんな物件があり、広さはこのくらいという程度のことしか発信していません。これはもう圧倒的に差があります。しかし他方では、業者がやっているという点で、また慣れていない方にとっては、本当にそうなのかという疑問が無いわけではありません。但馬になると元々宅建業者がいないので、ある程度行政がその役割を代行するのは仕方ないのですが、丹波の場合は地元を始め、あるいは大阪の業者に限らず全国紙などでも盛んに取り上げられているので、こうした方々と協力しながら、おいでになる方に信頼できる情報、頼りになる相談相手をつくっていくことが、そういうネットワークをつくっていくことが大事ではないかと思えます。

『高齢者の居住の安定確保に向けて』(平成 15 年度住宅審議会)

平成 15 年度住宅審議会の小委員会で、「高齢者の居住の安定確保に向けて」という答申をついこの間出したところです。その中で「課題と新たな施策の方向性」の一番目に「多自然居住」を挙げています。二番目が「郊外居住」、三番目が「都心居住」、四番目に「住み替え」ということです。多自然居住が最初に来ていることに、委員会の中でも「どうしてなのか」という疑問があります。それに対して、欧米ではこれが主流なのだが、日本でそれが主流になりえないというのは何か問題があるのではないかと申し上げているところです。

この小委員会で新年度には、木造住宅のあり方や地域の特性や個性に応じた住宅供給、県産材を活用した住まいづくりということも併せて取り上げます。具体的な内容について相談しているのですが、やはり魅力ある住まいづくりということを展開したいと思っています。

最後になりますが、出版物もたくさん出ています。「田舎で起業」、「団塊の世代とは何だったのか」、「田舎の家をたたむということ」、「長男の悩み、長女の憂鬱」、「定年後の 10 万時間里山暮らし」、「団塊ビジネスマンの退職後設計」、「月刊ふるさとネットワーク～ふるさとを見つけてあなたもラバーニストに～」という月刊誌も出ています。首都圏ではこれがまさにファッションになりつつあるようで、ものすごい温度差があります。

現在、篠山の外側でどういうことが起きているかということのごくあらましを申し上げます。

5-1) 篠山市における取り組み『篠山市緑豊かな里づくり条例について』

(若泰幸雄:篠山市政策部企画課)

現在、市内には261の自治会があります。これは合併前の旧4町で、また市役所のあるところですか、駅周辺の地域ですか、山間の集落ですか、それぞれ261もあると地域実態が違ってきます。一方で市の今後の土地利用の方向性ですが、平成12年に総合計画を取り組みました。特に土地利用については昨年度、国土交通省の補助を3年間受け、市内の土地利用の今後の方向性ということで13種類のゾーニングを施しました。そして昨年12月に議会に議決をいただき、篠山市の国土法に基づく土地利用の計画ということで、同じく13の区域に分けています。並行して、最終的には261のそれぞれの集落で自発能動的に取り組んでいただくものを優先的に土地利用に反映させるため、集落の土地利用の計画づくりを地域主体で取り組みを進めています。

この篠山市緑豊かな里づくり条例は、旧合併前の丹南町で平成9年10年の2ヶ年間で、開発等の要綱から条例化しました。開発行為を単発的なものとして捕らえるのではなく、あらかじめそれぞれの地域で、自分の村は将来こうあるべきではないかということ、土地に詳しい地域の住民中心に座談会やアンケートを行い、土地利用の計画をつくっていただきます。それを町長ないしは市長が認定します。それぞれの開発については、あらかじめ地元の協議会を通じて、地域の村づくりのための視点から調整をいただくという扱いをしています。現在この条例では、将来にわたって現在住まいがある中心的な集落区域ですか、将来も農業をしていく基盤としての農業区域、そしてバイパス等で沿道のサービス施設も建てられる特定区域ですか、現況の森林を保全していく森林区域、こんもりとした鎮守の森を中心に、将来にわたって景観も含め残していきたいという保全区域の5つの基本的なパターンを、地域の皆さん方により計画を策定しました。併せて、地域における建築物等の形態制限、さらには緑化推進について、条例上の計画事項ということで取り組んでいます。

平成9年から今年度末までで、3地区で策定され、3地区が取組中になっています。数の上からは261分の6になりますが、行政としても地域の皆さん方と一緒に頑張る中で、今日もお越しの横山先生や、県のまちづくり技術センターからもアドバイザーの派遣をいただいたりして、皆で地域の計画づくりを進めているという状況です。地域の課題はそれぞれにあり、条例上はあくまでも土地利用や計画事項ですが、13年度に篠山市の東部の中心的な場所の日置地区において、県の緑条例に基づく計画と並行して、本市の里づくり条例の計画もやっただきました。条例上の土地利用の計画や景観基準等、一定の内容の取り組みをされたわけですが、特に健康コミュニティに関する事項ですか、今は理想であっても、将来はこういう日置の集落にしていきたいという思いを取りまとめられました。

土地利用をキーワードにした里づくり計画制度ですが、いろいろな地域に入らせていただくと、農業の後継者不足や若者の流出などで、村の最低限度営まれていた自治会運営や、また祭事等の行事も支障をきたすのではないかという危機感を持たれています。そういった意味からも、現在の篠山市における、特にありのままの有効な資源を、もう一度それぞれの地域も行政も見直し発掘する中で活用できるのではないかと考えます。特に里づくり計画、里づくり地区の推進にあたり、土地利用のみならず、地域資源の有効利用という観点からも、地域活性に通ずる計画を提案していくことも大事ではないかという感じがいたします。

なお、日置の集落は、篠山の城から東側へ約8キロの篠山川沿いにあります。すぐ近くの磯宮八幡神社には国の天然記念物指定のハダカガヤという皮の無い実がなる大きなカヤの木があります。昭和50年の旧多紀町、城東町、篠山町が合併してできた旧篠山町の前身の城東町の役場のあった所在地でもあり、現在も篠山市役所城東支所があります。そのため土地利用においても、多面的な土地利用という集落構成がされている地区です。

5-2) 篠山市における取り組み『滞在型市民農園について』

(中原香:篠山市農政課)

篠山市では、都市住民に安らぎと潤いの空間を提供することにより都市と農村の交流を図るということを目的に、平成12年度と13年度にあった安らぎの交流施設整備事業を活用して、篠山市の塩岡と大山新の2ヶ所に市民農園を設置しています。塩岡は先ほどの日置から北東約4キロのところにはハートピアセンターがあり、その向かい側にハートピア農園が設置されています。大山の荘の里市民農園は、城から北西に約8キロの国道176号線沿いに設置されています。

ハートピア農園は、事業年度は平成12年度ですが、繰越予算になり実質工事が平成13年度でしたので、開設日が平成14年4月1日ということで、約丸2年経過したという形になります。事業費は1億円で、その内国庫補助金5千万円という形で実施しています。施設の宿泊棟は農地付きで10棟ありますが、洋室5棟の内バリアフリータイプが1棟と和室5棟という内訳になっています。施設の周辺には、管理棟1棟及び交流広場があり、そちらに東屋が1棟建っています。生ゴミを堆肥として利用していただいてもいいということで、10棟それぞれにコンポストが設置されています。東屋と交流広場、コンポストや管理機、草刈機は、ひょうご型市民農園整備事業(レベルアップ型)で導入しています。利用料金は、税込年間44万1千円で、光熱費、共益費は別途徴収となっています。それと最初の時に、敷金ではなく修繕費ということで、利用料金の半分の約20万円を預からせていただきます。修理費ですので、年間通じて修理等必要なければそのままお返ししています。利用期間は、原則1年間ですが、希望次第で最長3年間まで利用できます。当初より続いて継続されている方は現在7名で、遠隔地への転勤等により3名が辞退されましたので、新しく3名の方を抽選で決定いたしました。

大山荘の里市民農園は、事業費が1億6千850万円と少し高くなっていますが、ハートピア市民農園よりも宿泊棟及び農園の面積が大きくなっています。農園付きの宿泊棟は15棟で、ハートピアより1年後の平成15年4月1日に開園しています。こちらも遠隔地への転勤等により2名が辞退されましたので、新しく2名の方を抽選で決定いたしました。

それぞれに人気が高く、是非住みたいということで多くの問い合わせをいただいています。地権者と20年間の賃貸契約を結んでいますので市民農園自体も20年間は存続していきます。最長3年間という利用期間で、今後篠山に定住していただける方ができたらと市も空き家バンクなど情報発信へ向けて取り組みを始めています。

6) 多自然居住推進事業(今田町)の取り組み

(杉尾吉弘:篠山市今田町辰巳地区自治会)

『空き家バンクの取り組み』

空き家バンクをなぜ始めたかと言うと、実は今田で陶器まつりが終わると必ず空き家がありませんかという人が現れます。そのまつりには2日間で約10万人が来られます。普通、観光ではいいものを見ることを楽しみに来られますが、その中で気に入られてそこに住みたいという人が一定の率で出てくるのです。しばらくは、ほっておいたのですが、あまりにしつこく電話があつたり来られたりするので、何とかしようかということで平成元年の頃に、空き家という資産を活用したらどうかということになりました。それと、まちづくりはまさに人なのですが、その担い手としての良い人材がいません。今田でもそうなのですが、優秀な良く勉強できる子は皆東京の大学とかへ行って帰ってこないのです。そこで、今田にいるメンバーたちが、良い人材を集めるにも一つの方法だということで、空き家バンクというものを始めました。

たまたま新聞やマスコミに取り上げてもらったので、2ヶ月で一気に300家族の申し込みがありました。初めはお金持ちを呼ぶと税金が上がり、貧しい町が豊かになると思ったのですが、たまたま多かったので、焼物を活かして芸術家のまちにしようと考えました。焼物屋は石を投げれば当たるくらいおりますので、焼き物屋以外の芸術家を優先的に入れたぐらいです。実際は、空き家はあるのですが、その空き家を貸してもらうためには非常に

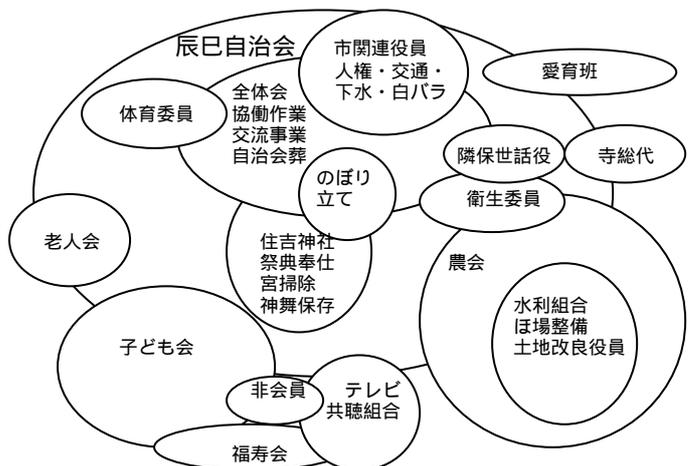
大層です。私たちが着目したのは、今田に住んでいて家を新築したら必ず古い家が残っていることです。そこをどうするのだと言うと、空き家で貸してもいいということで、空き家の持ち主の方と住みたいという方を紹介して、結婚で言うとお見合いですが、後はあなた方二人で勝手に話し合いなさいという形をとりました。それで、4~5件のアーティストを紹介して入ってもらいました。

これはまちにとっては、アーティストがいろいろな創作活動や個展をする時に、東京であろうがどこであろうが、今田町で創っていると必ず言いますので、非常にドライな言い方ですが、歩く看板が増えたということです。もう一つは、人材が確保できたということがあります。持ち主にとっても、月に何万円であろうが家賃収入が入るといことで、そういうところで始めたのです。現在はほったらかしです。勝手に来られた方が、その中でまた空き家があったら友だちに紹介して、人まで呼んでくる状態です。本当は制度としてやりたかったのですが、もう10何年前に空き家を活用する制度をつくってほしいと言ったのですが、勝手にやれというのが実態で、空き家バンクという名前はあってもほったらかしです。ただ10年ぐらい経った今は、来られた方がかなり定着してくれて、アーティストの方々が、今田だけでなく篠山市の市民センターオープンの際にも作品を持って行ってアピールしてくれたということで、まちの活性化にそれなりの成果は出ていますし、これからも継続していけると思っています。

『辰巳自治会の組織改革について』

私がたまたま生まれた辰巳という集落ですが、終戦後の当時に農家13軒を含めて24軒でしたが、現在は60軒になっています。位置は古市駅から2キロのところで、阪神間に近いので住宅地にちょうど良いところです。この集落に来るのは、有名な三田のニュータウンに住みたいが土地が高いので安いところへ来たという、どちらかと言えばサラリーマンでも若い層です。もう一つは定年退職されてのんびりと田舎暮らしをしたいという方です。民間の不動産屋が造成したところに家を建てられて、皆さんよろしくという形で来られていたのですが、昭和30年代の田中角栄さんの日本列島改造論の時に、辰巳自治会が持っていた土地はすべて売ってしまったのです。実はほとんどが共有林で家が建てられないのですが、たまたま裾野のところには水も電気あるし、道もあるので建てただけの話で、それで40軒ぐらい増えたということになります。60軒全てがコミュニティで自治会に入っているのではなくて、現在入っているのは45軒です。10軒ほどが自治会には入らずに住んでいます。残りの5軒は別荘です。ログハウスみたいなものを建てて、土日だけ4WDに乗って来て楽しくバーベキューをして、ゴミだけ置いて月曜日にはいないと。市のゴミ袋ではなく名前も書いていないために収集してくれないので、衛生委員がゴミを分別して名前を書いて出しています。地域ではそういう苦労をしながらも維持しています。

このままいけば少子高齢化で、私たちの世代が引退した時に、集落の自治会が維持できないということで、特に30代40代のメンバーからの要望があり、規約をつくりました。辰巳の団体組織の現状ですが、自治会の中にいろいろな団体が寄っています。神社から、農会の水利・ほ場・土地改良から、愛育班から寺総代から子ども会、それから非会員。これは自治会に入っていない会員ですが、住む権利はありますので、共同アンテナで映るテレビだけは組合員に入れています。子ども会も、子どもには罪が無いので、自治会は関係無しに一緒にやっています。福寿会は、従来型の自治会に反発した第2組合です。今は融合化で仲良くしようかという動きがあります。自治会組織自体は、テーマ別の組織に変えました。一つは総務部門・資産管理・自治会葬です。従来の組織では基本的な資産管理と情報管理です。自治会長と副と会計で総務部をつくっています。次に、衛生委員さんとか、市で言えば交通安全協会とか消防とかのメンバーをひっくるめて安全と環境部門。これは自分たちの生命・財産を、自治会の中でも一緒に検討しながら、でき



ることは自分たちでやっていこうというものです。当然、ゴミ掃除といったものはここが実施団体になっています。コミュニティ部門はイベントで、伝統的なお宮さんでの相撲や餅まきなどがあります。これは祭事という表現ではなくて伝統行事として、お宮さんに集まっても、新しく来られた方も参加してくださいということでやっています。それから地域振興事業部。これは集落でいうと村おこしで、特産品づくりなどを企画して実施するという形で4つのテーマ別に分けています。それを、私どもの集落では始めは1隣保、2隣保と言っていたのですが、表現が古いということで、班別で、男、女と分けています。それから各種団体という形で、神社や寺、子ども会などがあります。これは、やはり宗教とかを取り込むと、新しい方もめめますので分離しただけです。組織は分けていますが、実態は自治会の中の担当者が会議終了後に寺総代関係をやるので残ってくださいという形でやっています。

規約は、横須賀の700軒のマンション自治会規約をつくった経験のある方が集落に来られていたもので、その方を中心に田舎の生活とミックスして規約と細則をつくっていただきました。これをするために役員会を7~8回、全体会を3回やりまして、60代70代の高齢者の反発を私が口で抑えまして、一気に決まったということです。

7) 丹波における田園景観保全の状況『緑条例と田舎暮らしの情報発信について』

(金野幸雄:丹波県民局まちづくり課)

『緑条例について』

緑条例は、地域を区域区分して、そこに開発行為に関する基準を定めて、開発をコントロールするという制度です。丹波のゾーニングは、歴史的なまちの区域、まちの区域、さとの区域、森を生かす区域、森を守る区域の5区域に分け、それぞれについてルールを定めています。要するに、丹波全体として5区分のゾーニングをして、丹波らしい地域空間を守り育てていくことをやっています。一方で篠山市が地区レベルで、集落単位でより細かいルールづくりをやっています。ですから、県の方で、どちらかと言えば押さえつける格好で規制をかけているというのが一つあり、それと並行して市として里づくり条例で住民参加、地元の集落の皆さんが計画づくりをして、自分たちの集落をこうしたいというルールを持っているという二本立てになっています。両方できた場合は、篠山市の里づくり条例の方、住民合意によるまちづくりの方が優先するというルールになっているわけです。

緑条例に関して、多自然居住という側面から言いますと、さとの区域では開発がある程度規制されます。たとえば集団的な農地の中での開発はできませんので、今まで起こっていたような開発のバラ建ちを基本的に抑えていくということになります。これは幹線道路沿いも含めて農地内の開発を規制していますので、都市計画法などでの線引きよりもきつい面を持っています。それから大きな建物、具体的に高さは12m、大きさは床面積で500平米以上のものについても原則駄目という基準にしてあります。ただし、個人が住む住宅は条例が対象としていませんので一切規制がかかっていません。要するに、多自然居住で田舎に土地を求められて家を建てて住むことについては自由にできるようにセッティングしたわけです。

緑条例は平成7年から施行しているのですが、今申しましたような見直しを昨年10月に行いました。篠山市の里づくり条例は全国的に有名で、よく専門書や教科書に出てくる先駆的な条例なのですが、緑条例もこういう形で自治体の独自条例でやっているというのは全国でも珍しいもので、篠山はそういう意味では、こういう農村風景や農村環境を守っていく制度設計は一番日本で進んでいるのではないかと考えています。ついでに森を生かす区域ですが、山裾で傾斜が緩やかなところ、傾斜度20度以下のところを選定してゾーニングしています。これはどうなのでしょう。ウッディーな田舎暮らしをする人に適地というような区域とさせていただいたらよろしいかと思えます。ということで、多自然居住を進めるための環境づくりという意味でも進めているということです。

『田舎暮らしの情報発信について』

電腦サイト「丹波なんでも情報室」開設事業ですが、神戸まちづくり研究所からこういう取り組みをしようと、非常にありがたいお話があった時に、地元サイドでも何かできないかということで考えたものです。丹波には「たんばぐみ」というNPOがあり、今日もたくさん来ていただいています。そこと協働で企画した事業で、県民局とし

て来年度の新規施策ということで取り組むことが決定したものです。

何をするかと言いますと、「丹波なんでも情報室」という Web サイトを立ち上げるというだけのことなのですが、その特徴は WebGIS の機能を持っているということです。既にいろいろな情報発信をやっているわけですが、WebGIS 機能を持つことで、いろいろな情報が地図の上に載ってくるということになります。今日の集まりは丹波まちづくりプラットフォームですが、こういう Web サイトが一つのプラットフォームになり、うまくいけばいろいろな人がそこへ立ち寄るようになっていきます。皆さんがまず Yahoo を見るように、丹波のことを知りたい時はこのサイトへ来るというようなものをつくりたいなと、たんばぐみさんと共同開発、研究をしているものです。もう一つの特徴として、NPO がこのサイトを運営するというところがあります。行政情報だけではなく、NPO が運営しますので民間情報も当然自由に扱えるようになります。こういう形でやるのも多分全国的に珍しいと思います。たとえば宅建業の方が、このサイト上で地図情報付きで、空き家や土地の情報を流して商売するというのも可能になるというようなことを考えています。

こういうサイトができれば、皆さんでいろいろゲームソフトを考えて、ゲーム感覚で地域づくりをしようということを考えています。たとえば、多自然居住ゲームを開発して、そこへいろいろな人がそこへ来て、物件を探すとか周りの環境を調べるとかができるようにする。ここに行政や民間は、それぞれ必要に応じてプレイヤーとしてそのゲームに参加していくという仕組みの構想を考えています。16年から3ヵ年かけて整備するという予定ですが、とりあえずの仮オープンは来年度末で、今後1年間でオープンまでということ考えています。今日の議論などの情報発信に役立てていきたいと、多自然居住の情報発信に役立てていきたいと考えている次第です。

8) 篠山市における UJI ターンの実態と課題について

(吉岡種己: 篠山市行政監理部)

ちょうどこの春先から、国の方でも空き地や空き家の利活用というような調査を行うということで、それについては篠山をサンプルにして調査したいという話になりました。それで、東京からコンサルタントが来て、都市側から見た目なのですが、利活用の調査をやりました。私たちもお手伝いしたということで、「UJI ターンに関してのヒアリング調査」を使わせていただきます。(添付資料省略)

今回の調査は、都市側から見た宅地・空き家・空き地の利活用を目的としているわけですが、県でやっている多自然居住というようなテーマに近いところもあります。実際篠山市に来られている UJI ターン者 4 家族と、それを斡旋した民間不動産会社 2 業者、それから自治会役員の 3 名ということで調査させていただきました。実は杉尾さんの自治会の方も調査させていただきました。非常にサンプル数が少ない中で、どういうことが実態であり、どういうことを今後の課題とするべきかを、この頃考えているわけです。今日はそういうワークショップですし、来年以降に向けても、たたき台にさせていただいたらどうかと思い、それなりにまとめてみました。

実態として、まず一つ目に、田舎暮らしの希望者が思っていた以上に多いということがあります。確かにこれは、但馬などをやって感じていましたが、但馬に比べると篠山は地の利があります。事実その通りで、田舎暮らしの希望者が但馬に比べると圧倒的に多い。そういう人たちがどういうことを望んでいるかを、不動産屋さんからいろいろ聞いたのですが、せっかく篠山に住むのであれば菜園ができるくらいの土地は是非ほしいということが二つ目としてあります。三つ目に、宅建業者さんは仲介する上では、建物補修が必要な物件は、仲介ですので後々の補修についてのトラブルもあり、いやがっているということもあります。四つ目として、古民家の要望については、実際にあるのですが供給がちょっと少なく、空き地に建てる場合は結構プレハブも多いという印象があります。五つ目に、過疎地域には実際的な空き家は多いと私は思うのですが、実は顕在化していません。要は売りに出ていないということで、本人が売る意思が無ければ顕在化しようがないということではないかと思っています。六つ目に、古民家付きの売り物件はあるが賃貸物件はほとんどないということがあります。実際には賃貸してもいいという人はおられるようですが、多分不動産屋さんを通じての賃貸借には及び腰で、新たな方法(公的なバックボーンがあるなど)を考える必要があると思われる。七つ目の農地法が定住促進のネックになる場合があるという

ことは、宅建業者さんを回っていて、やはり農地法については業者さんから見ると非常に困った存在のようなどころがあるようです。農地法では農業者にしか農地を売買できないというか、登記できないことになっており、そのことが非常に重い。かつ、農地転用申請など、非常に大きい区域の土地を取りたい時に、かなり厳しいというような思いを宅建業者さんは持っておられるようです。

今後進めていく上での課題として、一つ目は実態空き家の活用方策ですが、その前にどれぐらいの実態空き家があるのか。業者さんは、朽ち果てるまではなかなか情報が届かない、もう管理できない状態になった時に初めて言って来られる例が多いと言われていました。ですから、実態空き家の状況を知ることでも大事で、しかも実態空き家が仮にあるとするならば、それをいかにして活用していくかを考える必要があります。二つ目は、先ほどの話にも出てきていますが、篠山市に、丹波に住みたいと思っている人へあらゆる情報のワンストップサービスをしているところが一切ありません。篠山の民家に住んでみたいという人があれば、物件情報ともどもそういうところが斡旋でき、かつ古民家を再生するところが紹介でき、また一般補修についても紹介できるなど、そういう住むということにおける全ての情報がどこかで一括管理できないかなということです。三つ目は、今回のヒアリングの中でもいろいろ意見が出ていましたが、新たな定住者についての受け入れ側のサポート体制があります。それと、どうも街から来られた方については、Uターン者もそうですが、地域活動に参加したいという声があり、そういうネットワークづくりとそれをサポートする体制をボランタリー的にできないでしょうか。四つ目として、先ほど篠山市の里づくり計画の話がありましたが、里づくりとあわせて、UJIターナーの受け入れをしても良いということについては受け入れ態勢づくりを里ごと、地域ごとにつくるという方法はどうかということです。五つ目に、滞在型市民農園の卒業者に対するフォローがあります。先ほどのUターン者のヒアリングですが、ハートピアセンターの市民農園の前をたまたま通りかかった時に、畑を耕していた方がおられたので、急遽ヒアリングをしました。その人は妻を静岡に残してその住宅に年3分の2程度住んでおられて、3年経っても再び借りたいが当たらなかつたらどうしようという話をされていました。滞在型市民農園の経験者には半定住、定住していただく、そういう住まい方も考えてみる必要があるのではないかとこのところを考えてみました。

答えを持っていないので言っぱなしになりそうですが、これが最初の一步なので、これをどのようにして動かしていくかというのを、神戸まちづくり研究所の方のアドバイスをいただきながら、地元でも何とかこれを動かす方法を、来年度以降考えていければと思っています。

休 憩

行政側の報告が多かったので、いくつかポイントを絞って、専門家も含めて民間側からコメントをいただいて議論をスタートさせたいと思います。まずは物件情報のあり方、都会の方から田舎暮らしをしたいという場合に、どのように情報を得るかということがありますが、既に先行して物件情報などを流しておられるK・G・Gさんが来られていますので、都会の人がどういう情報を要求しているのかとか、情報提供側としてこんなことをやっているという話をご紹介していただければと思います。

民間からの情報発信(白髭良幸:株式会社K・G・G)

15年から20年ほど前から、丹波の田舎暮らしということで都会からお客様が見えるようになりました。始めは仲介していたのですが、田舎の家は売ってもなかなか貸してもらえません。荷物もあるし、仏さんも祀ってあります。それと見ず知らずの人に貸すのだから返してもらう時が非常に難しいということがあります。それなら売ってしまおうということで、分けていただいた物件を手直して、お客様にお譲りしたり、仲介したりしています。

田舎暮らしに来られる方は非常に良い方ばかりで、こちらへ来られてもよく田舎に馴染んでいただき、まずは百姓をしたいと言われるので、トマトからナスの苗までお世話させていただいています。それと、私どもがお世話させていただいた方が何百人もおられるのですが、その中で「丹暮会」と言いますが、交流会を年4回程度開い

ています。自分たちの良いところ、悪いところ、こうしたいというようなことを、集まって一杯飲みながらしています。通知を出しますと60人ぐらい集まっていただけです。村の中に入ると、言いたいことも100%は言えないということで、ストレス発散口になっているようです。困っていることや、こう言えばうまくいったというような情報がたくさんありますので、お互いに情報交換の会にさせていただいています。一番求められているのは、やはりお付き合いで、ある程度の距離を置いたお付き合いを望んでおられます。

私どもも商売ですので儲けなければ経営が成り立たないということもあるのですが、できるだけ喜んでいただけるように、安く仕入れればできるだけ安くお譲りしようと考えています。それと不動産のことですので、どこに落とし穴があるか分かりません。相当トラブルを起こしている業者もたくさんありますので、徹底的に調査してお出しするということで、トラブルのない様に気をつけています。ここも値段の方も急激に安くなり、1千万円前後の物件をお探しのお客さんが相当あります。しかし、その値段ではなかなか提供できないというような形になってきていますので、値段的にはやはり1千5~6百万ぐらいが、私たちが提供できる一番安いクラスだと思います。

もう一つ言うと、農地法を変えてもらって、住まいされる方には農地は特別に特区のようなものをつくっていただき、農地は300坪までだったらOKだという形にしてもらえれば、もっともとお客さんが増えるのではないかと思います。お客さんは、やはり大阪、神戸からが多いという状況です。

都会から行く方は、田舎暮らしはコミュニティ豊かで、そこへ自分たちも入って行きたいという思いの方が多
いと思うのですが、新しいコミュニティを創造する会ということで赤井さんから、今地域のコミュニティがどうな
っているのかと、特に都会から人が来た場合にどうなのかということをお話いただきたいと思います。

新しく入ってくる人とコミュニティ(赤井俊子:新しいコミュニティを創造する会)

表面はいい顔をするのですが、実際にいろいろなことを一緒にやろうということになると、新しく入ってくる人への警戒心があるのです。だからそういう点で、溶け込むのは大変難しくしんどいだろうと思います。

私たちの地域通貨に入って熱心にされる方が意外と新しく入って来られる方なのです。何年前に来たとか、昔は住んでいたが定年で帰って来たとか、それから若い外から来たお嫁さん。そういう方たちが非常に熱心に私たちの活動に入られます。月に1回はイベントをしますが、来られるのはそういう人が本当に多いです。地元で育てて地元でずっといる人はほとんど来られないという感じで、それだけその人たちは普通のコミュニティの自治会には入りにくいのだろうということの実証かなと思います。結局は人とどう付き合うか、そのソフト面が一番大事だと思います。

それから女の人のことが出ていましたが、大抵奥さんが帰ろうと言わないと帰りたくないのではないかと思います。長男さんが帰って来られる時でも、大体奥さんは帰らないことが多いのです。その辺も、もうちょっと女性や奥さんが帰ってくる方の対策をしないと駄目ではないかなと思います。

たんばぐみの坂東さんに、受け入れ態勢とか、他所から移って来られた方とNPOとの関係とか、それからそ
ういう田舎暮らしやそういう人たちに対してNPOは何ができるのかのような話をお願いします。

NPOたんばぐみとして(坂東隆弘:特定非営利活動法人たんばぐみ)

地域ビジョンの中からたんばぐみが出てきているのですが、地域ビジョン委員の方は、都会から来られた方も含めて、一旦外に出て帰って来たという方が非常に多いのではないかと感じています。それで、新住民と旧住民のコミュニケーションがどうしたら取れるかというのは、多分地域通貨の未杜(みと)も非常に有効な方法だと思うのですが、赤井さんが言われたように、女性の田舎のイメージを調査する必要があるのではないのでしょうか。そのことがやはり大きいと思います。豊かなコミュニティが好きな人とわずらわしくて嫌な人とあるでしょうし、そういう部分があるのではないかなと思います。

NPO としてというのは無いのですが、こちらから働きかけようとしているのは、田舎の良さをとにかく分かってもらうのには定期的に会うということができるようということです。今、食文化でやっているのは、つくった人やつくり方が分かる、栽培履歴も分かるものということで、最初は野菜とかいろいろ考えましたが大変難しいので、まずはお米を考えています。神戸や阪神間のマンションの下に精米機をつけて置いて、好きなだけ精米して持って上がってもらう。これは非常に少ない単位ですむし、精米したてを食べられる。しかも、有機米であったりして非常においしいということでずっと定期的にいけば、そこへ今度は地元の野菜を持ち込み、そして GIS を使って、この農家とこの田んぼがお宅のマンションの契約田んぼですというやり方をして行こうと思っています。そういうことでつなぎながら、もっと深く知りたいという人が来られて滞在できる空き家の滞在型をそこに付けて、受け入れもできるということまで持っていき、定住に結び付けていこうという構想です。都会のマンション管理会社に知り合いがいますので、話をしてモデル的に入っていけるように今算段をしているところです。

先ほどから景観とかの話があり、来る途中でも地方ほどハウスメーカーの建物を建てたがるという話があったのですが、ささやま百年家推進委員の方に、そういう事例や苦労しているという話があればご紹介ください。

ささやま百年家の取り組み(稲井千秋:ささやま百年家推進委員、建築組合)

先日の土・日と百年家の見学会を行いました。その物件に関して、田舎らしい日本瓦は日本瓦なのですが、本当は漆喰で虫小窓が付いてという予定でした。基本はそうなのですが、やはり住む人のライフスタイル、30代の若い夫婦なので、漆喰や虫小窓はいやだと。かろうじて丹波聚楽と骨太というのは百年家の基本ですので問題なかったのですが、アンティークなスタンドグラスが見つかったから入れてくれとか、ちょっと我々の意図と反して離れるところがあるのですが、やはり住む人の家ですからできるだけ協力するというで仕上げました。新建材をあまり使わないということでは、始めの目的はクリアできたのではないかと考えています。ただ、自分の家を建てるのだから、どんな形でもいいではないかという話なのですが、お城の上に上がれば、せめて日本瓦が見えるような家にしたいと我々は思っています。行政もそういうところを規制するか、景観条例をつくってほしいという願いはあるのですが、そういう規制は多分無理だと思いますので、我々の取り組みとしては、地道に景観に合った家づくりを提案していくという方法しか無いのではないかと考えています。

それとこの頃は、古い家をリフォームされるというのが結構多くなりまして、去年で5件ぐらいのちょっと大掛かりなリフォームをやっています。都会に住んでおられて帰ってこられる方が1件あるのですが、それは茅葺の風情をそのまま再現してほしいということでした。それはご主人が言われかけたのですが、奥さんはそういうのは当然潰してほしいと大分家庭内で問題になったようです。ただできあがりかけますと、奥さんが友だちを月に2~3回引き連れて帰ってきて、ご主人は多分うちの嫁はんの溜まり場になってしまうぞという意見も述べられていました。囲炉裏があり、漆喰と昔梁を丸出して残しているわけですが、それなりの味が出ていますので、多分奥さん連中でにぎわうのではないかと考えています。そういう意識は、やはり都会に住んでいる人が来て良いと言うから、奥さんもこれがいいのかなという感じになってきたと思うのです。けれども、若い世代はやはりマンション形の部屋がいいとかいうふうの流れしていく。だからその辺の意識改革をどのようにしていけばいいかという問題を抱えて、頑張っていかなければ仕方が無いと思っています。

ここからは自由に発言をしていただきたいと思います。いかがでしょうか。口火を切って、Iターン経験者として藤岡さんはいかがですか。

Iターン経験者として(藤岡義也:お濠の学校、百人委員会)

吉岡さんからお電話いただいた時は会合のイメージがわかかなかったのですが、いくつか発言します。

一番重要なことは、僕も長期滞在型観光客という入り方ですが、別荘に来てゴミだけ残して帰るという人が山

ほど来たら、村づくりというのはおそらくできないと思うのです。そのことを少し忘れていないのではないかというのが気になります。定年退職して静かな環境でというようなやつには来てほしくない、部落の人は僕にははっきり言われます。なぜかと言えば、お前ら年金暮らして市民税も納めていないではないかと、そういうやつがここでサービスだけ受けていいとこ取りして帰るのであれば、どこが篠山の発展になるのだというふうに頻りに言われるのです。それに対して、僕は税制のことは詳しくないので説明ができないのですが、これをちゃんと説明しようと思えば随分暇がかかる話ではないかと思うのです。

もう一つは、僕の住んでいる集落には市議員の方がおられます。政治家は、住んでいる人々に将来はこうしたいのだという夢を与えることが仕事ではないのかという問いかけをしますが、返ってきた答は、6万都市構想が決まっているので、とにかく雇用を確保しなければいけないということでした。駅前の空き地に高層マンションを建てて開発するとか、何かIT産業を持ってきて若者の雇用を確保するとか、いわゆる開発中心の考え方が依然として市議員のかなり多くの方にある。先ほど出ていた農村をどうするかという問題、あるいは、多自然居住という言葉は始めて聞いたのですが、要するに自然が多様で豊かなところに住もうという意味だと思うのですが、そういう環境を維持するためには、このまちを支えている農業が一番重要だといつも思っています。その農業に対する施策というのがほとんど無い。僕の住んでいる村の人たちのほとんどは、農業では食べていなくて、大抵は年金で暮らしているのです。どうして一生懸命農業をやるのかと聞けば、これで祖先の土地を守るためとか、自然環境を守るためにやっているといふ言います。農業で食べていないということは、実際には多自然居住空間というのは風前の灯にあるわけです。そのことへの配慮が無いままに、長期滞在型観光客みたいなもののごそっと来たら、市としてのまちづくりが、経済的なことや社会環境を含めてトータルで成り立つのかが、自分で住んでいて分からないというのが正直なところです。たくさんの方が来てほしいけれども、いいとこ取りする人が山ほど押しかけてくるのが果たしていいのかと思っています。

カウンターアーバニゼーションと農業問題(小森星児)

リタイアした人や若い人々が大都市以外に住むというのは、ヨーロッパやアメリカでは30年ぐらい前から始まっています。これをカウンターアーバニゼーション、半都市化と呼んでいます。これを地元の人がどう受け取るかはそれぞれ様々だと思うのですが、少なくとも今のような意見はありません。なぜかと言うと、実はこれまで現実の問題として都市が田園を養ってきたのです。見かけの現象だけ見るのではなく、長い目で都市と農村のあり方を見れば、都市が富を生産し、農村を含めて国土の均衡ある発展のために財政が機能していました。今、その機能が乱れており非常に困っているわけですが、少なくとも長い目で見れば、個々の責任を負わず議論はあまり好ましいことだとは思いません。

先日、五色町でワークショップを開きました。五色町も新しい人たちがたくさん来ているのですが、福祉や健康にお金をかけた結果として、一人当たりの財政支出は県下では最低で、非常にバランスの取れたまちをつくっているわけです。というのは、いろいろ高齢者が来れば、その家族、あるいはそういう方々にサービスする様々な産業が発達して、これがまちを支えています。そうでなければ日本は潰れてしまうわけです。今ある産業の中で駄目になるものはあるかもしれませんが、新しいニーズがおき、新しいサービスが生まれていくわけですから、決してそういうことはありません。ただ農業がどうなるかということは大問題です。今まで農業をやっていた人が農地を守り続けるという形では維持できないことは明らかです。それをどうしていくかは、どの国でも農業をやりたい人に妥当な値段で農地を譲り、新しく農業をやりたいという人が受け継いでやっているわけです。今の日本ではそのメカニズムが動かない。農業をやりたい人が農業をやれないという事態をおこしていること自体が問題なのです。そういう意味では、もっといろいろな事例を見て、こういう自然が豊かなところをどういう形で受け継いでいくかという方法を考えるべきであって、今までのやり方で維持するのはどんな場合でも難しいと思います。

定年退職の人たちの力と経済効果(吉岡種己)

篠山の人口は既に、ほとんど平衡状態に入っています。これから自然増は見込めないし、社会増も見込めるかと言えば多分見込めません。ということは、篠山市は兵庫県の平均より先に人口がピークアウトします。高齢者が来ることでそれが解消されるかどうかは、いつもシミュレーションで困るところなのですが、結局のところ人口が減って何も良くなることはありません。定年退職の60歳から何年ぐらい地域活動ができるかは、多分平均的に見ても20年は活動できると思います。そういった人たちの力というのは絶対あるはずですし、その人たちの知恵を活用すべきだと思います。

もう一つは、経済は人の行き来だと僕は思っていますので、たとえば家1軒を直す、もしくは家1軒を建てることに、どれだけの経済効果があるかと言えば、単純な計算だけではなしに、それに付随するものを含めると非常に大きい意味があります。税金だけでも固定資産税があります。目に見えなくても、ありとあらゆるところに経済効果があるのではないのでしょうか。UターンにしてもIターンにしても、定年退職後に来てもらうことは、どう考えても市にとっても、既に住んでいる人たちにとっても悪いということは無いと思うのです。確実に超高齢化社会がそこまで来ているということで見ると、そういう人たちが増えて、それでいけないというはずは決して無い。逆に言えば、そういうことは駄目だと言うのであれば日本はもう当然倒れるということではないかと思います。

今回のそういう施策について、仮にボランティアセクターとの協働によって市も県も動くということになった時に、それは決して間違いの施策では無いと思っています。来てもらって何らさしさわりがあったり、来ていただいていることに決してマイナス面は無いと思っています。

担い手の増加と負担金(杉尾吉弘)

自治会運営で何が一番困ったかと言うと、実はお金でした。1軒1軒の負担金というのは、その集落のいろいろな環境とかで最低限のコストがいます。少ない戸数でお金を出していたのですが、数が増えたら1軒あたりの負担金が減るではないかと途中で変わりました。私どもの集落へたくさん来るので、需要があるので始めの時はちょっと多く貰おうかと、実は入村金を30万円でやったのです。途中で新しい方からクレームがきまして、即座に20万円に下げました。この前規約を変えた時には、今年は5万円というふうに下げています。

それはなぜかと言えば、入ってもらう方のハードルを下げてたくさん来てもらおうと。昔ながらの煩わしいこともいろいろあるのですが、それは住んだ方が自分たちで議論して自分たちで責任取るという自立型の住民に持っていけば、役員は楽ではないかと考えたのです。文句を言う人は新しい方も含めて役員にしてみえというような発想でテーマ型に変えたのです。後の詰めに3年かかるかもしれないですが、やはり担い手が増えたということで幸いに集落の負担金は減っています。やはり田舎でも、子どもが都会へ出て行ってしまった農家のおじいちゃんおばあちゃんだけでは、年間5万6万となれば負担金が厳しいのです。今は年間2万4千円で充分で、月2千円でやっていますので、そういう意味では年齢関係無しにたくさんいる方が当たり前のことですが運営はやりやすいです。その代わりに、来た人も住んでいる人もお互いに気を遣いますが、その辺はこれからコミュニティづくりで、バーベキュー大会をやったり酒を飲んだりして、いろいろな方法がありますので。

いいとこ取りと使役(藤岡義也)

僕はちょっとずうずうしいから何とかありますけれど、いいとこ取りというのはかなり難しいです。今の2万4千円とかいうのはびっくり仰天で、僕のところは月会費1千円ですが、会費を払うだけではなくて使役があります。要するに長期滞在型観光客の一番違うところは、そういうことに参加しないということでしょう。たとえばお祭りがある。そういうものを支えるというとは本当は大変なのです。あるいは、川沿いをきれいにするとか、あるところは欠席したらお金を取るところがあるそうなのですが、僕の部落は皆労力タダで出ています。たとえばそういうところに全く出ないで、自然はきれいですね、黒豆おいしいですねという、いいとこ取りだけで来ている人ばかりが増えて、1万2千円払って後は一切知りませんという場合には、地域というのが成り立たないだろうと心配しているのです。

悪いことばかり言っていますから、一つだけ自慢話をさせてください。私は集落と喧嘩しているわけではなくて、耕す田んぼを一畝貸してもらって黒豆を植えているのです。おい藤岡さん、今年はここを貸してやるからやれと言われてやっているのですけれど、そうすると20人分が30人分ぐらい都会の友だちにそれを送ることができるのです。すると必ずおいしいと返ってくるのです。時々ビールになって帰ってきたりもする。ついでに言いますと、長いこと間屋をやりましたから割と偉いさんと付き合いがあるのですが、たとえば文化功労賞をもらったお医者さんや京大の総長にも送るのです。するとちゃんと反応があるのです。こういうのは、私のささやかな喜びになっているのです。こういう暮らし方もあります。

田舎暮らしの勧め方(白髭良幸)

丹暮会の中で、自然発生的にお助けネットワークというのができています。たとえば、ご主人なりが入院された時に、誰も病院まで送れないというような緊急の時とか、あるいは近くだからちょっと行ってほしいとかの希望があれば、会員同士が連絡を取り合って行きましょうとか、迎えに行こうとかかというようなことまで進んでいて、今はその立ち上げ時期です。各個人でも、親しくなった方々が独自に交流もされていますし、お互いの家を泊まり歩いて楽しんでいただいています。最終的に夫婦どちらかが亡くなった場合にどうするのかということがあります。それで私の田舎暮らしの勧め方は、まちの住宅を売らないでおいでくださいと言っています。家を3千万円で売ってこちらへ来たいと言われても、1千2~3百万から1千5百万ぐらいで、持っているお金で対応していただいて、本当に動けなくなった時は田舎では住めませんので、田舎の住宅は次の方にお譲りするか賃貸するかして、帰れるところを残しておいてくださいというお勧め方を、元気なうちだけ田舎で住んでいただくということをお勧めしているのです。

田舎と都会の橋渡しの大変さ(向井祥隆:篠山市保健福祉部)

去年、転作の確認に回りました。奥の方の藤坂では、田んぼの半分は休耕ではないかというぐらい何もつくっていない状況でした。うちの村も1町からの農家さんが大分あるのですが、農業している人の平均年齢は75ぐらいです。息子たちは出ていて田舎にたまには帰ってくるのですが、姿を見る時は、草刈りや田植えと稲刈りの機械の上に乗っているぐらいで何もしません。親父が亡くなると息子はどうするかと言うと、他の農家に頼むわけですが、頼まれていた人たちも年齢が来て、他所の田んぼまで面倒見きれないということで預かっていた田んぼを返しかけたのです。それで、これから先どうしようかと悩んでいる人たちが、うちの周りでも随分います。

そういう状況の村の中での話しですが、ご承知のように若者が僅かしかいません。今、私は自治会副会長をしているのですが、後は50代がほとんどで、40代が数人です。これが夏の炎天下に川原の草刈に行くのですが、なかなかちょっとやそとではできないわけです。今の自治会の中ではこれが精一杯で、村山までは手が出ないという状況で放置した状況になっています。どの村でもほとんどそういう条件だと思うのです。だから若い人には来てほしい、住み着いてほしいという思いはあるのです。ところが、たとえば杉尾さんのところのように財産区が無いところはいいのですが、財産区の山やらそういったものがあると、これはなかなか昔の人ですから簡単にその中に入れてやろうというふうにはならないわけです。先ほどもいいとこ取りという話もありましたし、変な性格をしていたら困るというような危機感を皆が持っているのです。藤岡さんは総代もされたりして、随分と集落の中には溶け込まれていますが、そこまでの役が回ってくるには大変長い時間を費やさなければ村の中にはなかなか入れないと思うのです。ですから、あえてそういう橋渡し役をしようということは、紹介する都会での窓口も、田舎でそれを受けて空き農家を探すスタッフも、よほど性根を入れてかからないとうまく仲人役はできないと思っています。でもやっていかないと、集落が本当に大変な状況になっているということをあえて付け加えさせていただきました。

コミュニティと財産区を別個に(赤井俊子)

私たちの集落は、財産区とコミュニティの場を別個にしてあるのです。ですから、新しく来られた人は、財産区は別個にして、コミュニティの中へ入るだけでお金はあまり要らなくなっていきます。そういうこともできないかという提案です。

それと、杉尾さんへの質問ですが、テーマ別の部門に男性と女性がそれぞれ入られるということは分かったのですが、新しい人がそれぞれの各部門の中に入られるようになっているのですか。新旧関係なしに、自由に自分の意思で入ろうということでしょうか。

戸主という考え方(杉尾吉弘)

新しく来られた方も自由意志で入られますし、リーダーをされている部門もあります。役員は、戸主という考え方でやっています。その家から出るので、役員をやっている、旦那が半年や一年転勤だという場合は、奥さんが替りではなくその家から出てきます。これであれば、女性の方も場合によっては自治会長になる可能性があります。これは今田でも新しいやり方です。ですから辰巳では人口が増えているのです。

市民農園のコミュニティ問(小林郁雄:神戸山手大学)

市民農園に住んでいる方は、篠山市以外から来られると思うのですが、今みたいなコミュニティという話はどうなっていますか。10戸とか20戸とかおられるわけで、そこだけで何とかされているのですか。

市民農園のコミュニティ答(中原香)

市民農園の方は集落に属されていませんので、地域のイベントとかには参加されたりして、農業者の方と栽培について話されたり、青空市へ自分のつくったものを出してみようかということで関わりあいがあるのですが、集落のいろいろな取り組みについては参加されていません。その辺についてはちょっと自由な存在として住宅に住まわれてやっておられるのだと思います。

斡旋方法の一つとして(向井祥隆)

余暇で農業をされている人は結構楽しんでやっています。2畝、3畝ぐらいであれば結構楽しんでつくられるのだけれど、1反となればなかなか苦痛となって、1町ともなれば悲壮感が漂ってくるわけです。私のところも2畝分だけずっと貸している人が明石から週に1回ぐらい来ています。これはタダで貸しているのですが、その代わりに来るたびに明石の魚を持ってきてくれるのです。その人も結構楽しみにして持ってきてくれて、それだけの縁です。ずっと5年続いています。それはそれで結構楽しんで、僕らの知らない見たこともないようなものの種を一杯持ってきて植えているから、こちらと一緒にどうやこうやと世話をしながら喜んでいきます。そういう意味での交流の楽しみ方はいろいろあって、それもまた一つの斡旋方法であると思います。

地産地消(杉尾吉弘)

地産地消という言葉がありますが、実は今、お米を作っている農家で半分ほどは農協に出したくても売れてしまうのです。それは、新しく来られた方が目の前の田んぼのお米を食べたいということで、直取引でやっているのです。そういうことで、来られた方が少々わがままを言っても、農家にとってはお客さんだということで、農協よりも高く売れるという実利的なこともあるのです。野菜もできます。実は、転作が3割、4割とたくさんあった時は大変なのです。自家野菜で転作かどうかということはありませんが、一部を近所の農家ではない方に何年か貸すのです。それで農業もできるし、農家も助かると、自治会は農家でない方には、私たちが助かるのだということで、できたら地元の農家のお米を買ってくださいと言っています。それで、ほとんどの方は買ってくれています。だから売らなくても売れないと、今田の米はおいしいから余計にですけれど。

田んぼ畑付セット販売(坂東隆弘)

「たんばる」という食文化の取り組みの中で農家の方と話をすると、「丹波の自然がそのまま野放図な自然では無いことを良く覚えておけ。わしらがずっと管理してきたのだ。」と言われるわけです。実際に一生懸命やっておられてそうなのですが、今は本当に手が回らなくなって、山は荒れて休耕田も増えてきており、本当に深刻な状態になってきています。と言うことは、こちら側がもてあまして自然も、喜んでやってもらうのであれば、答えは自ずと出てきます。その部分を、都会の人が使いながら住んでもらうというのを徹底的に売り出して、そういう人たちに来てもらうのです。住むのであれば、田んぼ畑付きでないと売れません。農業も、自分の食べる分だけつくりなさいというふうにすれば、農薬をバンバンかける人はいないと思いますので、有機農法や転作で土も豊かになってきます。そういうふうにすると、自然を愛して、丹波を愛してくれる人が多く集まってくれるのではないかと思います。そういう人には、本当に安い値段でできるような援助をしてあげるといふ施策をやれば、そういう方々が集まって、平和な丹波が維持できるのではないかと思います。

また、そういう人たちは、丹波の家とかに関しても理解もあるでしょうし、建築の友だちが言っているのですが、若い人に聞くと地中海風の建物をと言って、始めから話をしないといけないことがあるらしいのです。だからそういうのでは無く、昔からの土間があって、こういうのがいいということを話す、なるほど確かにそういう家はいいなということになるのです。そういう部分で、たんばくみでやっている丹波環境基金というようなものを設立して、丹波で売れたシールの売上げの半分は基金に入るようにして、自然を守れるような位置づけのものをちゃんとしようという話でやっているのです。まだまだ微々たるものですが、そういうことを理解して少し高いけれど買わずという人たちが来てくれたらいいのです。

有機農家がどこへ売りに行くかと言えば、阪神間の阪急沿線に売りに行くのです。阪急沿線は理解があって、減農薬、無農薬を持っていくと高くてもすぐ売れてしまうと言うのです。リピーターもきちんとあって、結構そういうところで高く売れる。限られた耕地面積で栽培している生産物は限られていますから、どうやれば生産高が上がるのかは高く売れるしかないわけです。地元の直売場では、わざわざいいものをスーパーより安く売っています。地元の人はそのようなものに関して、ある面で理解が無いわけです。たとえば丹波の野菜は有名なのだということになれば値段も上がり、つくろうという意欲の人も出てきます。それを仕事にしてやっていこうという若い人たちも出てきます。今は、しんどい目ばかりして儲からないから担い手がない。良い人だけど、ちょっと変わっているなという人が頑張っています。

儲かるということも大事なことだし、休耕田や空き家の利用を考えれば、セット販売をするしかありません。そうであれば法律を変えておかないと困ります。特例か何かにしてもらって、そういうものではないかなと思うのです。

時間が大分経過しているのですが、今日はダンカン・マーシャルさんがオーストラリアからお見えですので、オーストラリアの田舎暮らしやつながりをどのようにされているのかをご紹介します。

オーストラリアの状況(ダンカン・マーシャル:オーストラリアの保存建築家、ヘリテージ・コンサルタント)

オーストラリアでも、同じこういった共通の問題があると思います。田舎では、銀行が閉鎖したり、いろいろな会社が引き上げたりして、そういう衰退がおこっています。ただ、田舎の人がどんどん都会へ出て行き田舎が空洞化していくということもありますが、一方では逆に都会の人が田舎へ行く動きもあります。そういう都会から戻ってくる人たちがいることで、銀行の閉鎖を止めたということもありますし、コマーシャルバンクという大きな銀行が引き上げても、コミュニティバンクというシステムが地域社会では生き残っていき、そういうものが衰退していつか地方都市を支えているということです。

人々は仕事と暮らしの間で、どちらに偏るのかということで大きな悩みを持っています。都市部で働いている人たち、仕事に偏っている人たちがバランスを取り戻そうとして田舎暮らしを目指すということで、ホビーファーム、

趣味のエリアみたいなものを田舎につくり、そういうところへ人々が集まっていくような現象も出ています。

非常にエネルギーなディスカッションを聞くことができ良かったです。ありがとうございました。

次のステップに向けて(吉岡種己)

今日が始まりですので、来年度をどのように進めていくのかをやっていただきたいと思います。私の考え方は間違っているかもしれませんが、(不動産屋さんのまねごとをすることは)行政の人間として非常に難しいと思っているのです。民間にできることは行政でできないのかというところがありますが、この問題は一步間違ると、何となくということをしてくれたのだということに結びつかないだろうかとこのところがあります。私の頭ではなかなか考えつかないので、神戸まちづくり研究所の方にも助けてほしいのですが、それまでに地元の方でやらなければいけないことがあるのではないかと思うのです。私の考えでは、特定のモデルケースかモデル地区で、地域づくりと合わせて、地元の人を引っ張り込む方法を考えていくとか、いつも堂々巡りになって終わってしまうのです。いきなりには答えは無いと思っているのですが、どういふうにして来年度以降を進めていけばいいのかのこのところの意見をお願いします。

自治会とのフォーラム(向井祥隆)

少し観光農園的な、それで快適に田舎を感じ取ってもらえるような機会が大事だと思います。いきなり住むというのは、住む方も招く方も大変なことです。それと、もう少し市をあげて理解を得ながら進めようと思えば、どの集落も自治会の役員さんが理解しないことにはどうしても通れないことなので、そういうところに理解を得られるような方法も進めていかなければいけません。自治会長の中でも、そういう地域づくりとかには全く消極的な人もいますから、そういうのは別として、特に積極的に取り組めそうな自治会の人たちとのこういうフォーラムもいいかなと思います。

お試し体験で双方向性を(杉尾吉弘)

お試しということで、田舎体験のお楽しみ会、あるいは農家民宿的に何泊かして田舎の空気とふれあう。その中で段々と、そこに住んでいる人の考えと、来られる人の考えが交わり合いながら一緒につくっていくというのが大事です。そうでないと、なかなか双方向でつくっていきませんから、しんどいかなと思います。

神戸まちづくり研究所として(野崎隆一)

今日は多自然居住をテーマに話し合いをしていただきましたが、これをきっかけにして、今いろいろな方が集まっています。こういうネットワークを皆さんでつくっていただき、継続的な場として意見交換をしながら、今言われたような具体的な問題はワーキンググループのようなものをつくって進めていく。また、メーリングリストをつくり、それでいろいろ意見をぶつけながら進めていくと、場合によっては半年に1回とか、実際に顔を合わせて議論していくというような場ができればというのが、実は我々のねらいなのです。

今日のワークショップについては、神戸まちづくり研究所として、皆さんの発言も含めて、ちゃんとした記録をつくらうと思っています。これは改めて皆さんにお配りしたいと思います。今日が1回目ですから、何回かは、神戸まちづくり研究所としてまたこういう呼びかけをさせていただいてやれればというふうに思っていますが、それについてご異論はございませんでしょうか。何回かやりながら、皆さんでまちづくりプラットフォームを運営できるようなチームが生まれれば、我々は引いて皆さんにお任せできればと思っています。今日は、多自然居住と言っても、いろいろな角度からの問題があり、報告もいろいろな角度からたくさんありました。全体像をなかなかつかみにくいと思うのですが、いろいろなフォーカスをつくって今後も続けていければと思っています。

最後に(小森星児)

正直言いまして10年前、20年前は、これほど丹波ブランドは評判が高くありませんでした。今や関西では、住みたいまち、行ってみたい地域で、丹波は非常に高いところにあります。やはりこれは、交通の発展によるアクセスの良さもありますが、地元の人たちの努力が一番大きいと思います。

今、日本の地域の半分ぐらいは将来どうなるか、合併で一時的に見えなくなっていますが、兵庫県でも北の方は養父、八鹿までは多分大丈夫ですが、その北になると、この先誰がこの地域を引き継いでいくかという大きな問題を抱えています。その上、将来についての見通しがありません。そういう意味では、やはり丹波が非常に有利な点に今立っているわけです。ただこのカードをどう使うかです。今は幸い大した問題を持っていないから、もう少しゆっくりしていても大丈夫かと言うと、私はそうはいかないと思うのです。なぜかと言えば、ずっとこれまで日本の高度成長を支え安定時代を担ってきた団塊の世代の人たち、その中の一番優秀でまだまだ能力のある方々をどこが獲得するか。今、都心回帰ということで都心のマンションへたくさんの人々が住まいを求めています。あるいは海外へとか、いろいろな流れが始まっているわけです。その中で一番やる気があり、地元プラスになる人をどう引っ張ってくるか、今地域戦力で大変大事なところだと思うのです。それと同時に篠山にはもう一つ使命があると思うのです。篠山はゲートにすぎません。福知山線沿線の奥まで来る人、若くパイオニア精神に燃えている人、あるいは1千5百万円を出せない人はもっと遠くへということもあります。しかしいきなり行くのは難しいので、やはり篠山でいろいろ情報を仕入れ、あるいは農業なりの田舎に住む体験を重ねないと、いきなり但馬の山奥へ行けと言っても、これはなかなか難しいと思います。

赤井さんから話がありましたが、アンケートの個別の意見のところ、私は行きたいけれど家内は賛成しないというのがあります。とにかく日本の個人資産の7割は実は高齢者が持っています。こういう人たちが、これから先は年金も無くなり先行き不透明だからといって、じっと縮こまっていたら日本の経済は縮小する一方なのです。やはり何らかの形のマルチハビテーションが大事だと思うのです。

それから、都市ですと一代だけでも土地が残るからいいとしても、丹波へ来る人は投資した分を次の世代にきちんと引き継げるような形で資産を残してもらわなければいけないと思うのです。残念ながら、兵庫県の中で個人の持ち家でプレハブが一番多いのは丹波だそうです。どうして丹波かと言いますと、一つは地元の人が好むということで、これは仕方がない。もう一つは業者が非常に力を入れている。多くのプレハブメーカーは滋賀県や奈良県に工場を持っていて、そこから高速道路だけで大型トレーラーで来られるというのは丹波が一番便利なのだそうです。それでハウスメーカーは丹波を主たるターゲットとしています。特に坪50万円代の庶民の住宅となると多分一番競争の厳しいところです。稲井さんにも、競争が厳しくて全然利益があがらないと聞かされたのですが、そんなことでは困るので、丹波に住んで、丹波の地区に似合った住まい方をPRできたらと思っています。ですから外部へのPRは我々まちに住んでいるものが引き受けて、入ってくる可能性のある方や実際に定着しようとする方々は地元の方々にお世話いただきたいというのが我々の願いなのです。そうは言っても最初はなかなかスムーズにいかないと思いますが、アンケートにもありましたように篠山市のホームページも充実していることは非常に有利な条件ですから、できるだけこういうことを活かして情報発信に努めてまいりたいと思いますので、どうかよろしくお願いします。

■ 記録ができましたらお渡ししたいと思います。今日は本当に長時間ありがとうございました。

「兵庫まちづくりプラットフォーム」

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号

神戸市生涯学習支援センター北棟3階

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所内

TEL : 078-230-8511 FAX : 078-230-8512

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp